

Title	最近の巴爾幹問題 (一)
Sub Title	
Author	林, 毅陸
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1916
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.10, No.4 (1916. 4) ,p.454(40)- 473(59)
JaLC DOI	10.14991/001.19160401-0040
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19160401-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

最近の巴爾幹問題 (一)

林 毅 陸

巴爾幹半島の形勢は最近に於て驚くべき新展開を示し所謂巴爾幹問題の上に重大なる新意義新色彩を與ふるに至れり。南部塞爾比人が昨年十一月英國國民に寄せたる檄文中に於て言へるか如く、巴爾幹は今や『世界政策の十字街』となり、列強世界政策の運命は正に此巴爾幹に於て決せられんとしつゝあり。英國能く其の強大なる海軍力に依つて北海を制し英國海峽を扼し得るとするも、獨逸若し確實に恆久的に巴爾幹を突破し、該半島を其脚下に抑えて以て各方面に躍出活動せんには、英の制海權なるもの果して何の用をか爲すべき。伯林アンハルト驛よりモンステンチノーブルに至る千五百三十哩餘の鐵路には、既に直通列車の通へるを見る。

ハムブルグより中歐を横斷して東に進むの大通路は既に開け居るなり。而して獨逸の巴爾幹を制するは、是れ小亞細亞を制するなり、メソポタミアを制するなり。而して波斯と波斯灣とは指顧の間に在り。又埃及に不斷の威迫を與へ、事あるに當りては、スエズ運河を扼して英帝國東西の通路を絶つも敢て至難なりとせざるべし。獨逸果して確實に斯る地位を占むるに至らんか、是れ其の世界政策の凱歌を奏するの時なり。而して之が爲に英露其他諸國の蒙るべき打撃は殆ど言語に絶すべし。即ち刻下の巴爾幹問題は其の影響する所の絶大なるものあるを見るべし。然らば獨逸は如何にして巴爾幹突破の目的を達するに至れるか。

抑も巴爾幹に於ける獨逸最近の勢力増進は、實に一大驚嘆に値するものあり。伯林公會時代には巴爾幹は獨逸利害の範圍外とせられ、ビスマルクの如きも唯英露の間に立ちて『正直なる仲買人』たるに甘んじたりき。然るに千八百九十八年の秋現皇帝ウキルヘルム二世が有名なる東方旅行を爲し、コンスタンチノーブルに土耳其皇帝を訪ひ且ジエルサレムの靈地に詣で、以て勢力の扶殖に着手して以來、非常なる速度を以て東方經營の地歩を開拓したり。而して千九百十四年の夏、今回の

大戰亂破裂の頃には、獨逸は既に事實上に於て土耳其陸軍の支配權を握り且其海軍の上にも大勢力を振ひ、遂に十一月に入るや土耳其をして獨逸の同盟として英露に開戦せしむるに至れるなり。當時土耳其は宛も獨逸の爲に開戦を強制せられたるの觀なきに非ず。個中幾多の不正と陰謀とを含むは蔽ふ可らざるの事實なり。と雖も、兎に角其手段の如何を問はず、遂に巧に土耳其を操縦して自己の命を奉せしめ、英露に大喫驚を與へたるは、獨逸の大成功なりと謂はざる可らず。

然れども土耳其を以て全然獨逸に致されたるものと爲すは速斷に失するの嫌なしとせず。想ふに土耳其は從來英露の不和を以て、自己保存の安全瓣と爲し、夷を以て夷を制するの慣用手段に依つて姑息の安を求め來りたるに、最近に至り英露は一變して親友となり、寧ろ相携へて土耳其の不利を圖らんとするの風あり。即ち英に頼りて露を制し若くは露に親みて英を牽制するの舊政策は最早之を施すの餘地なく、唯新進の獨逸の力を藉りて以て英露二國の壓迫に當るの外なからんとしたり。是れ土耳其の次第に獨逸に近づくに至りたる所以、其の遂に獨逸に加擔して英露に開戦せるも、敢て偶然ならざるものあるを認めざる可らず。之を以て單純

に獨逸術策の結果とのみ斷定し去るは、多少正確を缺ぐの嫌なきを得ざるべし。勿論獨逸に加擔するの得失は疑問なりとせんも、土耳其は二百年來の經驗に依りて露英の怖るべきを知るも、未だ獨逸の怖るべきを知らず。乃ち獨逸に與して露英に當るは、夫の夷を以て夷を制するの舊政策の一應用に過ぎざるなり。唯夫れ過去の實績に徴すれば、英露の不和を利用して其間に曖昧輕浮の政策を執り、以て一時を糊塗するに努めたるは、結局に於て多大の禍害を土耳其に與へたり。今回の夷を以て夷を制するの策亦同一結果に陷るの外なかるべし。戦局の勝敗孰れに決するを問はず、土耳其の將來は甚だ暗黒なりと謂はざる可らず。

二

然れども現在の巴爾幹に於て土耳其の態度よりも更に大に列強の注意を牽きたるは、勃牙利の其れなり。勃牙利が昨年十月十四日午前八時より塞爾比と交戦状態にある旨を發表し、以て公然獨逸に加擔して起つに至りたるが爲に巴爾幹半島の形勢に大變化を與へ、且延いて歐洲戦局の上に重大なる影響を及ぼしたり。塞爾比敗滅の宣告は、勃牙利驟起の日に於て與へられたるなり。希臘の畏縮逡巡も勃牙

利の獨塊に與したる爲に餘儀なき事となれるなり。又羅馬尼の動かんとして動く能はざるも其の原因此に在り。而して獨逸は勃牙利を羅致し得たるに依つて、巴爾幹突破を實行し得るに至れるなり。勃牙利若し中立を守らんか、獨塊と土耳其との連絡は結ばるゝに由なく、孤立の土耳其の窮境忍び難きに至ると同時に、獨塊亦封鎖内に於て苦悶を重ねるの外なかりしならん。今回の戦争はパンスラヴィズムとパンゼルマニズムとの衝突と稱せられ、人種的軋轢の爲に戰禍の破裂を促したりと唱へらるゝに、スラヴ民族に屬する勃牙利は、其の敵たるべきゼルマン派と結びて、同族の塞爾比を撃ち且大恩ある宗家露西亞に敵對す。是れ抑も何故なる乎。

吾人は此に至りて巴爾幹諸邦の關係論に移らざる可らず。彼等は從來土耳其に對する關係に於ては利害を一にしたるも、相互間の關係に於ては、利益爭奪の爲に相反目するを以て常としたり。勃牙利塞爾比及希臘の三國は、共にマセドニアを以て垂涎の地と爲し、互に他を妨けて之を自己の掌中に奪はんと欲したり。斯くて彼等の間に一致協同を缺ぎ、獨り土耳其をして漁父の利を占めしめたるなり。巴爾幹問題解決の期の後れたるは、實に主として此事情に基づく。列強相互間の嫉妬軋轢

も其の大原因となれるに相違なきも、苟も巴爾幹諸邦自身の間、に於て無益の紛争を避けたらんには、問題の解決は左程に困難ならざりしならん。巴爾幹の歴史は實に英露佛獨等の軋轢史なると共に巴爾幹諸邦自身の暗闘史なるなり。

然るに千九百十二年に至りて、珍らしくも、彼等の間に一致連合の成立を見たり。而して彼等は驚嘆すべき大成功を收め得たり。是れ即ち第一回の巴爾幹戰役なり。當時の連合に就ては希臘首相ヴェニゼロスを以て功勞最も大なりと爲すべきか如し。彼は千九百十一年四月タイムス通信員を仲介者と爲して、秘密の中に勃牙利首相ゲショフと同盟の協議を開始せしが、其提議の内容は(一)土耳其に於ける基督教徒の特權防護の爲に共同的行動を期するの妥協、(二)土耳其の攻撃に對する防禦同盟の二點に存したり。而して其數月後に至りて、塞爾比をも仲間誘ふことゝなり。勃塞二國の間に同種の交渉を開けり。其の結果勃牙利及希臘の防禦同盟條約は、千九百十二年五月十九日を以て調印せられたり。當時希臘はクリート問題の爲に土耳其と衝突せんとし、勃牙利は此問題の爲に戦争に引入れらるゝを好まざりしに依り、附帶宣言中に於てクリート事件を同盟規約の範圍外に置き、此問題の爲に

希土開戦となる時は、勃牙利は唯好意的中立を守ることゝしたり。

又勃牙利及塞爾比間の協議に就ては、塞爾比駐在の露國公使ハルトツイグ並に露國外相イスヴオルスキの大に斡旋するあり、勃牙利首相ゲシヨフは塞爾比首相ミロヅアノヴィツチと密に會見して協議を進め、遂に千九百十二年三月十三日を以て二國間に防禦同盟條約を締結し、且其中には征服地分割に關する取極をも設けたり。次でモンテネグロも同盟に参加し、斯くて巴爾幹同盟の成立となれり。千九百十一年九月二十九日を以て破裂せし伊土戰爭が、巴爾幹諸國民に對する大刺戟となり、土耳其の苦める此好機會に乘じ、相連合して以て大に爲すあらんことを思はしめたるべきは、固より言を俟たざるなり。

果然千九百十二年十月上旬、マセドニア改革問題を動機として起れる第一回巴爾幹戰役は、同盟軍の大勝に歸し、土耳其は連戰連敗の悲運に陥れり。千九百八年の十月、伯林條約を破りて獨立を宣言せし勃牙利が、同一條約を楯に取りてマセドニア改革の實行を要求したるに對し、土耳其の應諾を肯んせざりしは、敢て奇とするに足らず、且改革は自治を意味し、自治は分離を意味するの常なるが故に、土耳其の

改革反對は多少諒とすべきものなきに非ずと雖も、從來相爭ひし勃牙利、塞爾比及希臘等が大連合を組織せるに對し、トリポリ戰爭の創痕未だ癒へざるの身を以て應戰するに至れるは、勢情甚だ不利なりと謂はざる可らず。土耳其の一敗地に塗れたるは、敢て怪むを要せざるなり。

斯くて千九百十三年五月三十日の倫敦講和條約に依つて、土耳其は(一)エーゲ海岸のエノスより黑海岸のミヂイアに至る一線以西に於て、アルバニア以外の一切の領土を聯合諸國に割讓し、(二)アルバニアの處分を英佛露獨奧伊六國に一任し、(三)クリート島を聯合諸國に割讓し、(四)クリート島以外の在エーゲ海土耳其領諸島及アトス半島の處分を六大強國に一任したり。要するに放棄の形式に於て、或は直接に戰勝者に割讓し、或は六大強國の處分に委するの相違はあるも、放棄の事實に於ては異なることなし。正に是れ巴爾幹同盟軍得意の絶頂なり。

然り是れ眞に絶頂なり。禍機は既に茲に萌せるを見る。巴爾幹同盟瓦解に歸してスラヴ兄弟國の相屠るに至れる所以のもの、實に其端を倫敦條約に發せるなり。

今回の大戰に於て勃牙利か露西亞に反きて獨逸に與するに至れるも、遠因は自ら

當時の倫敦會議に存せるなり。英佛露の昨年の巴爾幹外交の失敗も其起原は千九百十三年に發せるなり。

三

吾人は先づ勃牙利及塞爾比間の征服地分割の密約を語らざる可らず。兩國は千九百十二年三月十三日の同盟條約中に獲物分配に就ての大體の協定を爲し(一)勃牙利は同國コステンデルの高處に近きエグリ・バランカより西南に向つてオクリダ湖に至る線を引き、其以東の地を收むる事(二)同線の西に接せるウスクブ・チブラ及オクリダ湖間の地方は之を未決地帯と爲して其處分を他日の協議に譲り、協議不調の時は露帝の仲裁を求むべき事、而して(三)其以外シャール山脈の北及西に在る總ての土地は塞爾比の有たるべき事としたり。此協定に據る時は、コチャナ、コブルル・クルシエヅオ及モナスチール等は、總て勃牙利の領内に入る。又塞爾比はプリシユチナ及プリスレンの外に、アルバニアに於て南方オクリダ湖よりヅラツゾに出づる迄を取る筈なり。

右の協定に付吾人の茲に特筆附記するを要するは塞爾比とアルバニアとの關係なり。塞爾比は港を有せざるの國にして外海に出口を求むるは其發達上絶対に必要と爲す。始にはボスニア及ヘルツェゴヰナを経てアドリア海に出づるの希望を有せしも、千九百八年埃か此二州を併合して以來最早他に道を求むるの外なきに至れり。乃ち塞爾比が北部アルバニアの獲得に全心血を注ぐ所以なり。對土開戰の翌月(千九百十二年十一月上旬)此問題に關する塞爾比人の主張として發表せられたるもの左の如し。

巴爾幹諸國中に於て塞爾比が獨り海港を有せざる其一種特別の地位は其の經濟的發達を甚しく阻害したり。塞爾比はアドリアに出路を得ざる可らず。是れ塞爾比の死活問題なり。塞爾比がアドリア海岸に地歩を得る事は、何故に他國の經濟的利益を害するや了解し難し。此問題に於ての塞爾比の意見は常に其の死活的利益に關するの事實に照らして其の正當なるを證明せらるゝのみならず、猶又塞爾比は此意見の遂行に依りて唯塞爾比帝國衰亡以前の舊所領を回復するに過ぎず。實に其當時に於ては、アドリアの諸港は繁盛なる塞爾比領市邑なりしなり。

されば塞爾比は銳意北部アルバニアに兵を進め、千九百十二年十一月下旬、愈々ラツゾを占領して、旗をアドリア海岸に樹てたる際の如き、歡喜措く所を知らざりしなり。

然るに塞爾比のアルバニア占領に對し、埃は最も強硬に反對し、獨伊亦之を助けたり。蓋し埃はアドリア海を自己の湖水と爲さんと欲するもの、敵意ある塞爾比をして同海岸に頭角を出さしむるは決して其利益に非ず。之を以て埃は熱心にアルバニアの自治及保全を主張したり。自治とは塞爾比が之に支配權を及ぼすを禁ずるの意にして、保全とは同國が其地の或部分特に沿岸地方を奪ふを拒むの意なり。而して伊太利は素とアルバニアに對して密に野心を包藏する所あり。之を他人の占領に委するは決して其の喜ぶ所に非ず。且千九百年に埃相ゴルホウスキー伊相グスコンチ・グエノスタとは、アルバニアに關する協商を結び、互に漫りに之に手を觸れざることを約し、以來一致協同を維持し來れるの關係あるか故に、今回塞爾比の計劃に關しても、十月二十二日埃相ベルヒートルトと伊國外相ギウリアノとは、ピサ會見に於て協議を凝らし、相携へて塞爾比の野心を破るに努めたり。當時露國

は塞爾比に對して深き同情を寄せ、其志を達せしめんことを熱望し、一時外交界の大問題となるに至りしも、遂に讓歩の已むを得ざることとなり、塞爾比はアルバニア撤退を強いられたり。而して列強は倫敦協議會に於てアルバニアを自治の一公國と爲すに決せり。是れ千九百十三年五月三十日の倫敦講和條約に於て、土耳其がアルバニアを戰勝聯合國に割讓せず、其處分を列強に一任したる所以なり。

塞爾比の北部アルバニア占領の目的は遂に大蹉跌に終れり。勃牙利と征服地分割の約を結ぶ際に、塞爾比人の腦裡に於て最も重きを置きたる獲物は遂に奪ひ去られたり。彼等の失望や想ひ知るべし。然も一方に於て勃牙利の得たる所は如何對土戰爭の意外なる好成績を挙げたる結果として、土耳其はマセドニアの外にスレースの約三分の二を失ひ、アドリアノーブル及キルクキリセは圖らずも勃牙利の手に落つべき成行となれるなり。スレーヌに於て斯程迄の獲物あらんとは、征服地分割條約締結當時に於て豫期せられざりし所なるなり。

されば自己の不運を悲み、且勃牙利の幸運を羨める塞爾比は何等かの方法に於て多少の報償を求むるの權利ありと信じたり。又倫敦會議に於て塞爾比をアルバ

ニアより逐ひたる列強は、他に於て多少の報償を塞爾比に與ふるの道を講すべかりしなり。然るに列強は何等の爲す所なかりき。塞爾比はアルバニア境界線其他に就いて意を安んじ難きものありたるを以て、講和條約の調印に先ちて相當の協議を遂げ置かんことを希望し、或は附屬文書中に相當の保留を爲し置かんと欲したり。希臘及モンテネグロも亦塞爾比と憂を同うするものありたるを以て、彼等は相共に講和條約の調印に躊躇したり。然るに列強外交家は、唯眼前の講和問題を速に落着せしむるに腐心して、將來に深憂大患を遺すことを顧みざりき。五月二十七日(千九百十三年)英國外相グレーは列強を代表して巴爾幹諸國全權委員に強硬なる警告を與へ、「若し諸君にして今猶講和條約に調印するの意なしとせば、最早倫敦に滞在するを要せざるべし」と斷言し、以て其の調印を迫れり。五月三十日の倫敦條約は斯の如くにして締結せられたるなり。

要するに塞爾比は倫敦會議に於て列強の爲にアルバニア撤退を強制せられ、然も何等の代償を與へられず。即ち去つて勃牙利と征服地分割法改訂の直接談判を開くの外なきに至れり。第二回巴爾幹戰役の原因は實に此に存す。列強外交家は巴

爾幹政治地圖の製作に干渉し、強いて威壓を加へて平和回復を促したるも、焉んぞ知らん。是れ適ま新戰亂を誘致する所以なりしなり。獨塊は寧ろ手を拍つて之を喜びたるならんも、露英佛は果して如何の感を爲せしや。三國協商諸國が倫敦會議に於て塞爾比を見殺しと爲したるは、當時の列強協調を維持する上に於て、已むを得ざりしならんも、其の遂に巴爾幹政局の大潰裂を惹起したるは、即ち大失敗に非ずして何ぞや。

四

第二回の巴爾幹戰役は、倫敦條約調印後僅かに一ヶ月にして破裂したり。塞爾比は(一)アドリア海に出づる能はざる事(二)勃牙利が豫期せられざりしアドリアノーブル獲得を爲せる事(三)對土戰爭の際塞爾比より豫定以上の援兵を勃牙利に與へたる事等を理由として、征服地分配密約の改訂を要求したるも、勃牙利は之に應ぜざりしなり。勃塞密約中に未決地帯と爲せる部分に就ては、勃牙利も露帝の仲裁を請ふに同意せるも、ザアルダル河右岸一帯の地方(モナスチールを含む)を與ふべしとの塞爾比の要求に對しては、勃牙利は斷然反對したるなり。又露國皇帝は巴爾幹

兩スラヴ國民の衝突を見て非常に憂慮し大に調停に努めたるも徒勞に歸したるなり。蓋し露帝はアルバニア問題に於て塞爾比を見殺しと爲したるの關係もあり、勃塞密約改訂問題に於ては、大に塞爾比に同情を寄せたりと雖も、然も又勃牙利に對して極度の壓迫を加へ得ざる事情も存したるが如し。六月上旬(千九百十三年)勃牙利の名首相ゲシヨフが突然辭職し、衆議院議長ダネフ之に代つて新内閣を組織したる際、倫敦タイムスは其事情に就いて左の如く報道したり。

條約改訂問題に關し、塞爾比は三月第二週に始めて之を勃牙利と露西亞とに申込みたり。當時之を發表せんには、土耳其の抵抗心を強むるの虞ありたるを以て之を秘したり。次でアドリアノーブル陷落の後、勃牙利は大舉チャタルジャを攻めんとて大準備を爲せり。露國はコンスタンチノーブルの危險を思ふて之を制止し、其代り條約改訂問題に付塞爾比をして條約の規定に従はしめんことを勃牙利に約したり。斯くて勃牙利は露國の盡力の下に土耳其と休戦したり。次で倫敦の講和會議となり、勃土二國委員は速に調印せんと欲したるも、塞爾比と希臘とは種々の註文を提出して調印を延引せしめたり。而して塞爾比は此間を利

用して露京に於て條約改訂の事に努力せり。其の如何にして露國政府を動かしたるかは不明なるも、兎に角講和條約調印の少し前に於て露西亞は前約にも拘らず、勃牙利政府に向ひ、管に勃塞二國間の係争地帯即ち未決地帯のみならず、更に同地帯外のクラトヴォ、ヴェレス及クルシエヴォの地區を塞爾比に與へんことを勧誘せり。而して其の理由とする所は平和及同盟の維持の爲に此讓歩を必要とすと云ふに在りたり。是に於てゲシヨフは辭職する事となりたるなり。

果して之を以て事實なりとせば、露西亞は西に於てアルバニア問題に關する列強間の紛糾を恐れて塞爾比に讓歩せしめ、以て同國に對する道德上の負債を作ると同時に、東に於てコンスタンチノーブルに關する疑懼の爲に勃牙利の進撃を制止して、其代りに密約改訂の件に就いて塞爾比を助けざるの豫約を與へ、以て上記道德上の負債を返済し得ざるの窮地に陥りたるなり。露西亞の調停運動が不成功に終り、塞爾比は唯劍に依つて勃牙利との爭議を決するの外なきに至れるも、洵に已むを得ずと謂はざる可らず。

勃牙利軍と塞爾比軍との交戦は、六月二十九日より三十日に亘る夜に於て、不規

則なる状態の中に開始せられたり。希臘は塞爾比と盟約を結んで之を援け、モンテネグロも亦起てり。加ふるに勃牙利の外交上の不用意は羅馬尼軍の侵入となり、又土耳其軍の再攻撃となり、勃牙利は四面に敵を受けて悲惨なる敗衄を蒙りたる末八月十日(千九百十三年)大屈辱のブカレスト講和條約に調印せざるを得ざる事となれり。此條約に依り勃牙利はマセドニアに於て(一)塞爾比とはサラニカの北方に位するドイラン湖よりストルミツアの西を迂廻して北上するの線に依つて境界を爲し(二)希臘とはドイラン湖より略真直に東に向ひてメスタ河に達し同河口に下るの線を以て境と爲し、又(三)東北部勃牙利に於てダニユープ河岸のツルツカイの南の地點より東に下りてバルチック港の南に至る一線を劃し、其以外の地を羅馬尼に割譲したり。希臘と塞爾比との境界は、ドイラン湖より西南に向ひ、ヴオデナの北を経てプレスバ湖の南端に至る。更に又勃牙利は九月二十九日土耳其と結べるコンスタンチノープル講和條約に依り、エーゲ海岸マリツア河口より北上し、モンドラに於て同河を離れて稍西に曲がり、オルタコイ及ムスタファバシアの東を通過し、それより北東に向ひてレスヅアヤ河口のスグエチ・ステ・フアンに至る一線を以て土勃間の境界と爲し、其以外の地を土耳其に還附したり。アドリアノーブル及キルクキリセは其中に含まる。

勃牙利は第一回の巴爾幹戰役に於て最も功勞ありたるにも拘らず、征服地の處分に於て餘りに強情を張り、且外交上の細心を缺きたるが爲め、巴爾幹五國の包圍攻撃を受け、遂に右の如き大損害を蒙りたるは、自業自得とは云へ、洵に憐むに堪へたり。エーゲ海岸に於てサラニカを希臘に奪はれたる勃牙利は、少なくともカヅアラ港を保有せんと欲し、ブカレスト會議に於て大に努力する所ありたり。露西亞は餘の勃牙利に同情を寄せて之を助け、奧太利亦塞爾比を牽制するの關係上より勃牙利の希望を達せしめんと欲したるも、希臘に好意を有する佛と獨とは却つて露奧と反對の態度を執り、遂にカヅアラを希臘の手に領有せしめたり。露奧はブカレスト條約調印後に於ても其の改訂を保留し、少なくとも勃牙利をしてカヅアラを恢復せしめんと欲したるも、一方に於ては、獨帝の羅馬尼王カールに親電を寄せてブカレスト條約の成立を祝し、且希臘王コンスタンチンを獨逸陸軍名譽元帥に任命し、以て同條約承認の意を公表するあり。又他方に於ては、佛蘭西の輿論の熱心に

カレスト條約改訂に反對するあり、露、奥も遂に改訂を斷念するの外なきに至れり。

想ふに獨逸皇帝が希臘のカヴラ領有を助けたるは、既に親族の間柄なる兩國皇室の交誼を更に大に濃厚ならしむるの利ありたるのみならず、之に依つて勃牙利を極度の絶望の淵に推し、ブカレスト條約破棄の大決心を起さしめたるは、即ち巴爾幹大禍亂の種を植て以て、獨逸の爲に乘すべきの機會を備えたるに異ならず。獨逸皇帝は此成行を豫見してブカレスト條約改訂に反對したるや否やは疑問なるも、兎に角巴爾幹の今日あるは、正に此に胚胎せるなり。當時の佛國政治家が勃牙利を極度の絶望に陥らしむるの非常に危険なるを思はずして、漫然條約改訂に反對したるは、淺慮の謗なきを得ざるべし。露西亞に至りては、改訂論の主張に依つて、微妙なる政治的本能の働けるを示したるも、其の不成功に終りたるは深く惜まざる可らず。

最近の巴爾幹問題に於て、露國の犯せし第一の重大なる失策は、塞爾比をアルバニアより遂ふに同意して、然も何等報償の道を立てしめず、遂にスラヴ兄弟戰の避

け難きに至らしめたるに在り。第二の重大なる失策は、勃牙利をブカレスト條約の極端なる絶望より救ふを得ず、遂に今回の復讐戰を誘起せしめたるに在り。兩者は殆ど其性質を同うし、相重なりて以て巴爾幹の政局を收拾し難き大紛糾に陥らしめたるなり。巴爾幹スラヴ國民にして苟も一致の状態を維持せんには、露國は依つて以て此方面に至大の勢力を占むるを得るも、其の紛議一轉して兄弟相食み相屠るの大決裂を來すに及んでは、露國勢力の根底は直に覆へされざるを得ず。而して兄弟新に深き怨恨を結ぶに乗じて、他の禍心ある者の其間に種々の猾策を講ずるに至るは、亦是れ必至の勢なり。露國の遂に巴爾幹を失ひ、勃牙利の遂に獨逸に走れるもの敢て偶然に非ざるを見ずや。而して英佛二國の此失敗の責任を分たざるを得ざるは勿論なり。三國協商の巴爾幹外交は奥のボスニア及ヘルツェゴヴィナ二州併合事件以來、實に失敗をのみ繰返せるなり。然も其失敗は敢て之に止まらざるを如何せん。